

第 20 回 パシフィック・アイランダーズ・クラブ懇談会
講演録

(2016 年 6 月 28 日 於：明治大学紫紺館)

2016 年 7 月 22 日
太平洋諸島センター (PIC)

第一部 太平洋諸島センター2016 前半～貿易・投資・観光・人的交流～

司会 (高田 P I C プロモーションコーディネーター)

皆さま、本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。ただ今より第 20 回パシフィック・アイランダーズ・クラブ懇談会を始めます。私は本日の司会を務めます太平洋諸島センターの高田と申します。どうぞよろしく申し上げます。

2009 年に始まりましたこの懇談会も今回で 20 回目を迎えました。当初は出席者数も 80 人ほどでしたが、回を重ねるごとにより多くの方にお越しいただき、今では 150 を超える太平洋関係者の皆さまが一堂に集う会へと発展しました。これも太平洋島嶼地域に対する皆さまの関心が高まっていることを示しているものであると存じます。これからも皆さまにとって、より有意義な懇談会を開催してまいりたいと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。

さて、本日も講演は 2 部構成となっております。前半は、今年前半の太平洋諸島センターの活動について私からご報告させていただきます。後半は、ポリネシア地域での勤務を経験された JICA の三村悟さんと *Essentially Japan* の平田奈々さんをお迎えし、これまでのご経験談などのお話を伺いたいと思います。モデレーターは小林泉大阪学院大学教授、太平洋協会理事長です。

太平洋諸島センターの 2016 年前半を振り返って

(司会) 第一部として、太平洋諸島センターの今年前半の活動を振り返ってみたいと思います。今年は、1 月に国際化粧品店という貿易関連の展示会に出展しました。例年はこの時期、食品が中心の展示会に出ていましたが、近年、太平洋諸島ではココナツオイルやタヌオイルを原料とした良質な化粧品を開発する企業が増えてきているほか、サモアではイランイランという植物から抽出する精油が完成しています。これらの製品のバイヤーとのマッチングを図るため、今年は初めて化粧品に焦点を当てた展示会に出展しました。

今回はニウエ・サモア・バヌアツから現地の化粧品会社を招聘し 3 日間、製品 PR や日本側企業との商談を行ってまいりました。バイヤーの皆さまは太平洋諸島に化粧品製品があるということ、またその質の高さに大変驚かれたようで、展示会終了後も多くのお問い合わせを頂きました。現在も引き続き取引開始に向け協議が続いている企業がありますので、PIC としてもフォローしていきたいと思っています。

次に 2 月ですが、マーシャル諸島で貿易担当官や日本への輸出希望企業を対象としたビジネスセミナーを開催しました。このセミナーは現在の日本市場のニーズや、既に日本に

輸入されている太平洋諸島産品の成功例などを紹介しながら、マーシャルの場合はどう日本市場にアプローチしたらいいかを一緒に考えるワークショップ方式を採りました。マーシャル政府は既にマーシャル製品であることを証明するロゴマークやキャッチフレーズなどを考案していただきましたので、今後は PIC からアイデアを提案しつつ、PIC のカウンターパートであるマーシャル諸島の資源開発省と一緒にマーシャル製品のプロモーションに取り組んでいく予定です。セミナーには同省のアルフレッド大臣もご出席され、これまで以上に同省と PIC が密に連携し、マーシャルから日本への貿易拡大に向け取り組んでいくことを期待するとのお言葉を頂きました。

4 月には恒例のマリンダイビングフェアに出展しました。今年も太平洋諸島各国の駐日大使館や政府観光局、現地のダイビングインストラクターの皆さんと共同で、太平洋諸島で楽しめるマリンアクティビティーや観光についてプロモーションしました。初日に開かれたデスティネーションセミナーでは、ダイバーや新しいデスティネーションを目指す来場者の方々を対象に海の魅力を中心としたフィジー・バヌアツ・ソロモン諸島の最新観光情報について詳しくご紹介しました。また、ブースではフィジーやパラオなどは以前から人気でしたが、最近の出店ではクック諸島やバヌアツなどに関する問い合わせも増えており、太平洋諸島の観光地としての知名度が少しずつ高まってきていることが感じられます。今年には特に昨年日本と国交を結んだニウエ、クジラを間近で見ることができるトンガに注目が集まっていました。

5 月には、貿易案件の商談サポートとビジネスセミナー開催のためクック諸島に参りました。まず貿易案件についてですが、以前より PIC が輸出希望企業として推薦していたクック諸島のスキンケア製品の企業と日本の美容サロンが取引を開始する方向で交渉を進めており、現地にてその最終調整の商談を行いました。詳細の発表は夏以降になる見込みですが、クック諸島産のアンチエイジング効果の高い実から採ったオイルを使ったスキンケア製品が日本でも入手可能になりますので、ぜひご期待いただければと思います。また、ビジネスセミナーですが、日本でますます高まっているオーガニック、ナチュラル製品志向の傾向や、意識が高まりつつあるエシカルについてプレゼンテーションを行い、現地の貿易担当官や日本への輸出希望企業との意見交換を行いました。クック諸島には環境に負荷を掛けない、不法労働や搾取がない、地域経済の発展に貢献するといった生産体制下で作られたエシカルな工芸品や服飾品が多くありますので、今後日本側のバイヤーに積極的にご紹介していきたいと思っています。本日会場においでの方々の中にも取り扱いにご関心のある企業の方がいらっしゃいましたら、サンプルをご覧いただくこともできますので、後ほどお声掛けいただければと思います。

5 月中旬には JETRO との共催で第 1 回太平洋諸島ビジネスセミナーを開催しました。このセミナーでは、既に太平洋諸島に進出し活躍中の日本企業の皆さんにご経験談などをお話いただいたほか、今後太平洋諸島でビジネスを展開していくことの魅力などについてお伝えしました。ご出席いただいた方々からは、太平洋諸島でビジネスを始めるための基礎知識や現地の投資環境などの情報が得られてよかったといった感想を頂きました。

ここまで今年前半の PIC の活動について報告させていただきました。次に一点告知をさせていただきます。昨年 5 月にいわき市にて開催された第 7 回太平洋・島サミットでの提言に、日本と太平洋諸島との貿易・投資・観光促進の重要性が盛り込まれたこ

とを受け、太平洋諸島センターでは昨年 12 月にフィジーへのビジネスミッションを派遣しました。これに次ぐ第 2 弾ビジネスミッションとして来月 28 日、29 日の日程でサモアにビジネスミッションを派遣します。今回も多く企業の皆さまにご参加いただいていますので、有意義な個別商談、個別訪問等を行っていただけるよう現在準備を進めています。ミッションの成果につきましては今年後半に開催する懇談会でご報告させていただきたいと思っております。

第二部 ポリネシアから太平洋へ

(司会) 次に後半の講演に移りたいと思っております。ここからはモデレーターを小林泉大阪学院大学教授にお願ひし、ゲストの JICA の三村悟さんと Essentially Japan の平田奈々さんにお話を伺っていきたくと思っております。

三村悟さんは JICA サモアオフィスで勤務され、JICA 本部の大洋州課長を務められたほか、福島大学の特命教授として教鞭を執られたご経験もお持ちです。現在は JICA 地球環境部次長兼防災グループ長、また JICA 研究所上席研究員としてご活躍でいらっしゃいます。

平田奈々さんはクック諸島の現地旅行代理店にて 4 年間の勤務を経験されました。現在は Essentially Japan にて来日するラグビー選手のマネジメントに携わっていらっしゃいます。

では、小林先生、三村さん、平田さん、よろしくお願ひします。

小林泉大阪学院大学教授 (モデレーター)

皆さま、こんばんは。半年ぶりの太平洋懇談会になります。おなじみのお顔をまた拝見できて、大変嬉しく思っています。

この懇談会は、太平洋島嶼国を話題にするということで、皆さんにお集まりいただいています。太平洋島嶼国とはミクロネシア・メラネシア・ポリネシアの 3 つのネシアから成り立っているとよくいわれます。これは 19 世紀のフランス人の人類学者、デュモン・デュルヴィールが人類学的・地理学的な観点から便宜的につけた分け方だといわれています。ですが、大ざっぱな特徴を示すのであれば、この 3 つのネシア分類はいまでも有効だと私は思っています。

ただ、その地域のほとんどが日本の委任統治領だったミクロネシアについては、なじみ深いのですが、メラネシアやポリネシアはどの範囲か、どう違うのかについて、ここにお集まりの皆様の中にも、意外とはっきりしていないという方がおられるのではないのでしょうか。PIC の講演会では、このような一つの地域をテーマにするのは初めてですが、きょうはこの切り口で、ポリネシアについて話を進めたいと思っております。

本日は JICA の三村さんと、平田さんをお呼びしています。どちらもポリネシアには大変詳しい、さまざまなご経験がある方です。三村さんは JICA でサモア所長をやられ、大洋州課長も経験されています。そして単に、職責で島嶼諸国に関わってきた以上に、私らといつも太平洋のことを考えておられる仲間の一人として、私は認識させていただいている人物です。

一方、平田さんは 16～17 歳だった高校生の時からニュージーランドに留学、そのまま向こうの大学を卒業、就職もされて、9 年間ニュージーランドに住んでいました。さらにそれから 4 年間、クック諸島で先ほどご紹介のあったお仕事をされました。クック諸島は、日本からかなり遠い所ですけれども、ポリネシアに分類される島です。今日はクック諸島を沢山お話しになりたいと思いますが、これを抑えてポリネシア全体の話をしていただき、時間が許せばクック諸島に特化したお話もしていただきたい。

ポリネシア社会・文化の特徴とは

(小林) それでは、ミクロネシア・メラネシアとは違うポリネシア的な要素とは何か、どんな国々なのかというところから、まず三村さんにお話を伺います。よろしくお願ひします。

三村 悟 (JICA 地球環境部次長)

皆さん、こんばんは。JICA 地球環境部の三村と申します。先ほど小林先生からのご紹介で、私は JICA に勤めていて、いわゆる人事異動で大洋州に関わるようになったのですが、それでも大洋州の仲間だと言っていたことをすごく嬉しく感じています。

最初に私自身のポリネシアあるいは大洋州との関わりのあるところからお話をしますと、私は JICA に入る以前にオーストラリア資本の会社に勤めていまして、その時に当時西サモアと呼ばれていた、今のサモア独立国、それからポリネシア地域・メラネシア地域と仕事上のつながりはあったのですが、実際に行ったことはありませんでした。

その後 JICA に入りまして 1999 年にサモアの事務所に異動になりました。当時はそれこそポリネシアとメラネシアとミクロネシアの違いも分からないまま現地に投げ込まれたような感じでした。

サモアに着きまして最初に感じたこと、これはポリネシアの特性といえるのかどうか分かりませんが、それまで私は長年アジア、それからアフリカの国々、人々と関わってきたのですが、これまで私が行ってきた国とは全く違うと思いました。人々が非常にフレンドリーであるということが第一ですが、フレンドリーであるということだけではなく、人に対してこびているわけではない。優しいけれども、こびているわけではないし、かといって何か見返りを求めるところもない。人と人が対等に向き合う姿勢を持つ人々だと強く感じました。それは、その後に大洋州の中のほかの国々を訪れても、ポリネシアの一つの特徴ではないかというふうに感じています。外国人に対して親切だけれども、こびない人たちですが、一方で外国人だからといって特別扱いをしない。外国人だからこれは許してあげるといっても少ないと思います。外国人に対して対等に、それは特別扱いもしませんし、よそ者だから大目に見るといってもない人々です。ほかの地域の人に比べると、それが特徴的なのかなというふうに思います。

何でそういう人たちなのかと、ずっと考えていたのですが、一つにはポリネシアの人たちは非常に外向きの人たちだと思います。例えばクック諸島の人にはニュージーランド国籍も持っています。サモアの人でも多くの方がニュージーランドのパスポートを持っている、あるいは親戚がいるということで、ほかの国との間を行ったり来たりしています。サモア

人としてのアイデンティティーも持っているし、ニュージーランド人としてのアイデンティティーの強い方もいらっしゃるということで、非常に複雑なアイデンティティーの持ち方をしている人たちだと思います。一方でサモア人としてのプライドは非常に高く持っていらっしゃいますし、サモアという国に対する非常に高いロイヤリティーを持っていると思います。大家族制度のサモアでは家族をととても大切にしますが、その延長線上に国があるのかなというふうに感じています。

サモアの人たち、あるいはポリネシアの人たちはもともとアジアのほうから、ブタとヤシの実を抱えてカヌーで渡ったと。漫画チックにはそのような感じだと思いますが、そういう航海をする人たちだということ。それが彼らの広い視点といますか、アイデンティティーは持っているのですが、それがイコールその土地に完全に縛られているわけではないということにもつながっているのではないかと感じたところです。

(小林) ありがとうございます。今 PIF 諸国の中で具体的にポリネシア諸国といわれているのは、サモア、トンガ、クック諸島、ニウエ、それからツバル。ちなみにメラネシア諸国とは、パプアニューギニア、ソロモン、バヌアツ、それから独立国ではありませんがニューカレドニアです。

では、域内大国のフィジーは？今日は、フィジーの話をする気はないのですが、フィジーは地理的にはメラネシアに分類されます。ですが、ポリネシア文化がかなり入り込んでいる。ちょうど日付変更線を上から下に直線で引くと、フィジー諸島にぶつかるので、日付変更線をひん曲げてあるわけですが、フィジーはポリネシアとメラネシアの文化的な接点になっています。ローカルフィジアンといわれる先住民もポリネシア系とメラネシア系のそれぞれの人々がいます。よって、フィジーの文化・人種に関してはその件だけで一回分の面白い話ができそうですが、今日はその件には踏み込みません。ミクロネシアに属する国々は、日本が統治したミクロネシア 3 国にキリバス、ナウル、そして独立国ではありませんが、グアムやサイパンもミクロネシアです。

オセアニア社会のナショナル・スポーツとしてのラグビー

(司会) さて、それら三つのネシアの中で、近年のポリネシアと日本の関係は、結構深いのですが、これはあまり知られておりません。

昨年あたりから急に日本でもラグビーが話題になっていますが、ラグビー選手として日本に来ているポリネシア人が沢山おられるのです。この会にも、元ラグビー選手の方が何回もお見えになっていますので、ここにおられる方はある程度ご存じだとは思いますが、それ以上の実情は、あまり知らないのではないのでしょうか。

そこで、その辺のことに詳しい平田さんにお聞きしたい。私自身も楽しみにしていますので、どうぞよろしく。

平田奈々 (Essentially Japan)

こんばんは。平田と申します。よろしくお願ひします。このことについて人前でお話をしたことがないので、とても緊張しています。現在私はニュージーランドの会社に属して

いまして、ニュージーランド・オーストラリア、それから南アフリカのプロのラグビー選手、日本の企業のチームで活躍する選手のエージェントをしています。今、トップリーグというラグビーのリーグがありまして、それは五郎丸選手が入っているヤマハ、東芝、サントリーなどのチームがあるリーグです。そこで助っ人外国人としてプレーをしている選手が100人以上居ます。。その下に2部リーグ、3部リーグがあり、そして大学のリーグもありますが、それを全部足すと300名ぐらいのラグビー選手が海外から日本に来ているかもしれません。

今現在は世界で一番のタイトルを、2冠をワールドカップでも獲得したニュージーランドの選手が多いのですが、実はその次に多いのはトンガの選手だといわれています。皆さんご存じのようにトンガはすごく小さい国なので意外な感じかもしれませんが、ニュージーランドやオーストラリアから選手を取る場合はスーパーラグビーという世界最高峰リーグからマスター選手を取るわけですが、トンガのプレーヤーは大体大学生や高校生の時にスカウトされて日本に来ます。日本で学生生活を送りながら日本語を勉強して、そこでラグビーを頑張って企業に採用されるという形でプレーヤーになっていきます。企業に参加して1年目、2年目のころには日本語もペラペラで、それから3~4年、プロフェッショナルな選手としてプレーをして、日本人に帰化して、日本のパスポートを取得して、日本人プレーヤーとしてチームに貢献することもできるので、トンガの選手は大変重宝されています。

先ほどもあったように、すごく日本人になじみやすい文化といえますか、とても素直で親切な方が多いので、すごくなじむと思います。順応していくための意欲といえますか、ほかの国の選手よりも早く日本語を覚えて、早くチームになじんで、チームのカルチャーを自分に取り込もうという姿勢が、ポリネシアの選手は大変強いように思います。

(小林) ありがとうございます。ニュージーランド先住民のマオリという人たちはポリネシア人ですよ。クック諸島から渡ったという歴史があるそうですが、今、ニュージーランド人のラグビー選手が一番多いとのことでしたが、それはマオリ系ですか、それとも白人系ですか。さらに次に続く方々はトンガ、それともサモア？ その他のポリネシア地域からは如何でしょうか。

(平田) ニュージーランド人は、ピュアなマオリはもういないといわれている感じで、皆さん混血で、一概に言うのは難しいのです。ニュージーランド代表のチームはオールブラックスと呼ばれていて、とても有名ですが、そのほかにもマオリ・オールブラックスというマオリの血が入った選手のみで形成されたラグビーチームもあります。そこに入るのは本当に敷居が高いといえますか、すごく誇りになることで、文化の伝承のためにも歌やチャントや言語を皆さん一生懸命勉強して、有名なハカをしたりします。

(小林) その他にも、ラグビーで日本に来ている方はいますか？

(平田) (平田) 最近は南アフリカの選手が多いのですが、ポリネシアで言うと、やはりトンガや私が住んでいたクック諸島などの島でもラグビーは断トツで一番人気のあるスポーツです。とにかく男の子で運動神経が良ければ、まずラグビーをさせるような国なので

優れた選手はたくさんいるのですが、クック諸島やトンガのような小さい国でそのままラグビーを続けてプロになるというのは不可能に近いのです。ですから、ニュージーランドでプロ選手になりたいという選手は大体 13 歳、14 歳の時に留学して、ニュージーランドのラグビーアカデミーに入らないと逆に選手になれないという環境です。

そういう人たちにとって日本に来るチャンスがあるというのはもう本当に素晴らしいことです。オールブラックスというのはラグビーをする男の子たち全員の夢だと思いますので、もちろんそこを狙っている人もいますが、日本に来るといのは本当に村中、国中が大騒ぎするような素晴らしい機会です。大好きなラグビーで活躍して、自分の名前を世に知らしめて、そしてすごく安定したお金ももらえる。選手生命もニュージーランドでプレーするよりも長いといわれているので、日本に来るといのは本当にビッグドリームです。

(小林) そうですね。ちなみに、ミクロネシアではラグビーをほとんどやりません。バスケット、あるいは日本統治領だったので野球は結構やっています。メラネシアも、フィジーを例外としてあまりラグビーをやりません。

私は去年、ちょうど日本が南アフリカにラグビーで勝った直後にサモア、フィジーを訪れましたが、その際に訪問した場所での先方の挨拶は、決まって「日本の皆さんにまずもっておめでとうと言います。あのマッチは素晴らしかった」というものでした。その時の私は、「南アフリカに勝った」というぐらいのニュースは知っていましたが、それ以上に話題になっていませんでしたので、戸惑いました。

なにしろ、フィジーを含めて、ポリネシアの国々のラグビーは、国技のようですね。それから、今、思い出しましたが、大相撲は現在はモンゴル人一色ですが、最初の外国人力士はハワイの高見山、その後、小錦、曙、武蔵丸が来ました。ジェシー高見山はハワイ出身ですが、ハワイも元はポリネシア人です。曙も武蔵丸も小錦も全てハワイ人のようですが、そのルーツはサモアかトンガでした。

大航海時代に西洋人が太平洋に渡った時、彼らはポリネシアの人をコーカソイドだと思った。コーカソイドとは、ネグロイド・モンゴロイド・コーカソイド、いわゆる黒人種、黄色人種、白人種という三つの伝統的な分け方の一つです。それは体が大きく、日焼けを除けば比較の色が白く、彫りも深い。見た感じは西洋人そっくりだから、これはコーカソイドだとする初期の報告書があるようです。ただ今は、遺伝子分析などができますので、ミクロネシア人とポリネシア人は、先ほど三村さんが言われたようにモンゴロイドだと言われています。

メラネシア人は、古い文献ではアフリカ黒人と同じルーツのネグロイドだといわれていましたが、最近の人類学ではその黒人種にもう一つオーストラロイドという別分類ができて、そちらの方ではないかといわれています。太平洋に渡ってくる年代が、1 万年か 2 万年ぐらい前から来たのがメラネシア系の人たち、そして 7,000~8,000 年前から 5,000~6,000 年前ごろまでに何回に分けて島々を渡って来たというのがミクロネシア人とポリネシア人だというふうに人類学ではいわれています。ただ、どうしてミクロネシア人とポリネシア人の形態があれほど違うのか、それを明確に説明してある本を私は読んだことがありません。

ポリネシア社会における産業開発

(小林) 先ほど三村さんが、ネシア間の違いをお話ししていただきました。実際に、挨拶や人との接し方なども、それぞれかなり違いがあるようです。では、三村さんの様々なご経験から、仕事あるいは産業開発の観点で考えたときにポリネシアの特徴というものがあるとすれば、その辺のことに特化してお話を伺いたい。

(三村) かなり難しいご注文を頂きましたが、まずは先ほどのラグビーの話を少しさせていただきますと、現地にいた時にアピアでソフトボール大会がありまして、私は1塁を守っていました。そうしましたら、サモア人のバッターがぼてぼての内野ゴロを打って1塁余裕でアウトというところだったのですが、私が1塁でボールを取ろうとしたら思い切りタックルを食らいました。先ほどお話があったように非常に大きい人たちですから、私は体重が58キロぐらいですが、優に倍はある人にドーンとぶつかられて、自分の感じでは5メートルぐらい吹き飛ばされた記憶があります。恐らくスポーツにおいては、ボディークンタクトがないものはスポーツではないと思っているのではないかと感じたところがあります。

ポリネシアをビジネス、あるいは仕事という切り口で見たときにどうなのかということをお話しします。私たちは政府間の援助の仕事をしているので主に接するのは相手国の政府の方ですが、たとえばメラネシアの場合はもともと独立してからの歴史が非常に浅いですし、国の中のまとまりもそれぞれの細かい「部族」—という言い方をあえてさせていただきますが—、部族に分かれていてそれぞれの違いがありまして、近代的な統治というものがなかなかまだ行われていません。法制度も守られないようなところもあり、われわれが仕事をする上ではなかなか難しいところを感じます。一方で、ミクロネシアについて言いますと、少し偏見のこもった言い方になってしまうかもしれませんが、日本の統治があって、アメリカの統治があって、かなり宗主国に従属するような印象を持っています。

これらの地域にくらべてポリネシアはもともとトンガを中心とする王国で、自分たちの国をつくってきたと。大航海時代にいわゆる西洋人に「発見」されて、そこから人を奪われ、国土を奪われということになってくるのですが、それでも彼らの中には国としての非常に強いアイデンティティーを持っていたのではないかと思います。そういうところがあるからなのか、ポリネシアの方はほかの大洋州の地域の方に比べて非常に外交的で、お話の仕方、外交的なプロトコル、交渉、語学も含めて非常に上手だと感じます。非常に小さい国ですが、交渉事など自分たちの主張を伝えることがとても上手だというふうに感じています。気候変動枠組条約で有名なツバルもポリネシアですけれども、そういうところが国際場裡で非常に大きな力を持って発言しています。人口1万人ほどの国ですが、国際場裡でもそうやって人に訴え掛けていくことができる素養を持っていると感じます。

国内行政はどうかといいますと、これはかなり心もとないかなと思っています。外向きにはとてもアグレッシブに、またプレゼンスを高めていけるのですが、国内的に例えば教育、あるいは私自身は長らく環境分野の仕事をしていましたので環境について見ていきますと、国内の行政は非常に弱いと感じます。よくよく見てみますと、国の中のトップの方はニュージーランド・オーストラリア・アメリカなどに留学されて、例えばハーバードの

ビジネススクールなどにも行っていた方がいますが、そういうところでもまれて世界の政治のシーンあるいはビジネスのシーンで活躍できる人たちがいます。

その一方、国内の普通の中学校や高校を見ても、かなりの子たちがドロップアウトしてしまっている現状もあります。そうしてみると、ちょうど中間層のところ国内に欠けてしまっているように見えます。エリートの人たちは外に出て活躍する。あるいは国のトップとして活躍できるのですが、真ん中のところがすっぽり抜けてしまって、あとはドロップアウトした経験のある人たちになってしまっています。特に理数科の知識、技術的な知識が足りないのではないか。大工さんや水道の職人さんのような方はいるのですが、職人はいるけれども技術者がなかなかいない。そういう真ん中のところ、テクノクラートあるいはエンジニアというものが欠けています。これは政府間の仕事をする上でも、あるいはビジネスをする上でも足かせになってくるのではないかと思います。

われわれ JICA は国づくりの協力をやっていますが、そこで見ていても問題になるのは、人材育成の対象となる基礎的な素養を持った人が十分にいるのかどうか。あるいは、そういう人がいたとしても、その人たちが国に定着するかどうか。それから、われわれは国際協力を行います、未来永劫ずっと差し上げ続けるわけではなく、自立していただくのがわれわれの目的です。しかしながら、われわれが手を引いた後の自立発展がなかなか難しいということを感じています。

他方で、国際社会でのプレゼンスの示し方は、日本人としては大いに勉強しなければいけないところだと思います。そういう非常に複雑な様相を持っている国あるいは地域だと感じています。

(小林) 結構、複雑な社会のようです。あまり詳しく話す時間はないのですが、三つのネシアの文化的な社会構造を考えると、ミクロネシアとポリネシアは母系社会を形成しており、基本的には同じです。現代化の中で今はどんどんと変化してきていますが、基層文化は母系制社会。それに対して父系制社会を形成しているのがメラネシアです。ただし、メラネシア国家のパプアニューギニアでも、本島から離れた小さな島での生活条件はポリネシアやミクロネシアの小さい島と似ていますから、母系制のところもちろんあります。ですから、大きな分け方での一般論としてネシア間の違いを捉えていただきたい。

とはいえ、同じ母系制から来る文化でもミクロネシアとポリネシアはかなり似ているようですが、微視的に見ると地域的な違いも少なくありません。先ほど三村さんが少し触れましたキリバスとツバルですが、人口 1 万人しかないツバルがなぜ独立したか。ここはイギリス領だった時にギルバート・アンド・エリス諸島とっていました。ですから、イギリスは、ギルバート・アンド・エリスで独立国にさせるつもりでした。ところが、キリバスはミクロネシア系の人、エリス諸島はポリネシア系なので、少数派のエリス人たちが「文化の異なるミクロネシア人と同一国家作るのはいやだ」と主張したのです。そこでイギリスは「そうか。それでは、しょうがない」と主張を認めて、ツバルという 1 万人の国ができました。太平洋社会は比較的単純に思われますが、それでも一歩、二歩踏み込むと、やはり入り組んでいて分からなくなる。だから、「最初の印象ほどそれほど単純ではないな」と、勉強すればするほど感じています。

日本社会で生きるポリネシア出身の元ラグーマンたち

(小林) 話は変わりますが、ポリネシアからラグビー選手がたくさん日本に来ても、スポーツ選手ですから、ずっとラグビーをやっているわけにはいきません。では、選手生命が終わったら、その人たちはどうしているのでしょうか。先ほど、あまり具体的には触れられませんでしたので、ラグビー選手の待遇なども含めて教えていただけませんか。

(平田) 小林先生からその質問を受けて考えてみたのですが、ポリネシアの選手はニュージーランドなどのほかの選手に比べても選手寿命が長いことに気付きました。37～38歳、39歳までプレーをしていたポリネシアの選手がたくさんいて、今のトップリーグというラグビーのリーグも社会人チームといいますか、社員選手がほとんどです。チームに45人から55人ぐらいの選手が所属しているのですが、そのうちプロと呼ばれる選手は本当に10人いるか、いないかぐらいで、ほかは社員選手です。日中お仕事をし夜と週末にラグビーをする選手が多いのですが、今までポリネシアの選手は社員契約だった方が多いので、引退した後も例えば三洋電機、トヨタ自動車などで社員さんとして働いている方が多かったようです。

外国人がラグビーだけに集中するプロ選手という契約になってからこちらに来た選手は、今も現役で活躍している選手が多いのですが、その方たちはたぶん15%ぐらいが日本の女性と結婚して、子どもたちも日本の学校に行って日本語を話しています。そういう方たちは結構、今もまだ活躍しているのですが、これからはコーチや学生チームの監督になりたいという夢を抱いている方が多いようです。

待遇の話ですが、社員選手として入るときは大体新卒で入るとき一般的なお給料プラス、ラグビー手当というものが出ますので、最低300万円からという感じですが、プロ契約になると何年もやっけていられないこともあり、結構な額をもらっている選手もたくさんいます。1,000万円プラスという方もいますので、本当にトンガなどの選手にとって日本に来るということはビッグドリームです。

(小林) 日本は、稼げる国なんですね。前にここでお会いした方から、日本在住のサモア人やトンガ人がコミュニティをつくられていると聞きました。その辺のことを、ご存じですか。

(平田) そうですね。ラグビー選手は結構日本になじみたいという気持ちが強い人のほうが多い気がします。私が住んでいたクック諸島も15個の島からできているのですが、15個全部合わせても2万人ぐらいの人口で、その倍以上の5万5,000人のクック諸島人がニュージーランドに住んでいるような国ですが、そのニュージーランドにもクック諸島のコミュニティがあって、クック諸島の言葉を教える学校があります。先ほども言ったように、土地にかかわらず国のアイデンティティを持って、国に誇りを持って、その文化を伝えていこうという気持ちはすごく強いと思いますが、日本に来たポリネシア人は少し違うかもしれません。

(三村) 今の日本に来たポリネシア人のお話で言うと、ラグビーが一つ大きな求心力にな

っていると思います。例えばマヌ・サモア（サモア代表）が日本に来て日本代表と試合をすると、秩父宮で日本代表のサポーターたちが赤白のユニホームを着ている中で、在日のサモア人の人たちやサモアの青年海外協力隊の OB の皆さんがブルーのシャツを着て集まり、スタンドの一角を占めます。4～5年前ですと圧倒的にマヌ・サモアは強かったので、私がよく覚えているのは、テストマッチの時にノーホイッスルでサモアがトライを取りまして、私たちサモアのサポーターたちも「おーっ」と手を挙げて喜んで、サモアの方はサモアの国旗を持ってスタンドを走り回りました。それがトライを3本ぐらい続けざまに取りましたら、あからさまに日本のサポーターに「おまえら何だよ」という感じで、非常に日本人としては冷や汗をかきました。

それから、ラグビーのセブンスの大会になるといろいろな国が来て、一日に何試合もあります。そうすると、フィジーやサモアなどそれぞれの国の人たちが集まって、それぞれのチームカラー、フィジーだったら白のTシャツを着て、しかもフィジーやサモアの料理を家から持ってきて、スタンドの中でフィジーとサモアとトンガの人それぞれが集まるというリユニオンの機会、その求心力となっているのがラグビーなのかなと思います。

（小林）先ほどラグビーは国民的スポーツだと言いましたが、それだけ皆さん、熱くなるのですね。

昔、ミクロネシアでダンスを見ていたとき、隣にいる親しい友達に「あれはプロのダンサーか」と聞いたことがあります。すると、げげんな顔をして「プロフェッショナルというのは、どういう意味だ？」と聞き返されました。彼は「島で暮らす者は、誰もがダンサーだ。自分も、その時がくれば踊るんだよ」と言いました。いわゆるお金のため、職業としての踊りではなく、生活の中での踊りですから、そもそもプロのダンサーという概念はないという話です。それと類似の文脈で、ポリネシアで「あなたもラガーマンか？」と尋ねれば、「当然だろう。どうしてラガーマンじゃないんだ」という返事が返ってくる。私には、全員がラグビーをやっていたとは決して思えないのですが、「男でラグビーをやっていないのは、ポリネシア人ではない」というふうな雰囲気があるように思われました。そのくらい、男の世界ではラグビーが重要な役割を占めています。ならば、ポリネシア人女性には、男のラグビーに匹敵するようなスポーツなり何なりは、あるのでしょうか。

（三村）そうですね。やはりポリネシアの場合ですとダンスです。男女別のダンスもありますし、一緒に踊るのもありますし、よく学校や地域のコミュニティーなどで何かお金を集めなければいけないときはそういうダンスを披露します。村の人たち、あるいは学校の子たちがダンスを披露して、おひねりではないですが、皆さんがお金を入れていくということをやってお金を集めることが一般的に行われています。また、そういうダンスが非常に上手です。

クック諸島観光の魅力と日本のポリネシア地域への援助方針

（小林）はやいもので、もう時間が来てしまいました。そこで、お2人に最後の質問を振らせていただきます。

先ほど紹介したように、平田さんはクック諸島に4年いて、観光プロモートをやっていた。日本から遠いのですが、実はクックはものすごく観光が発達している素晴らしいリゾート地です。そこで、いろいろお話ししたいことがあると思います。

そして三村さんですが、メインのお仕事である国際協力、援助、特に防災や環境問題に力を入れておられるようですが、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシアという地域の違いにより日本の援助方針の違いのようなものがあるのかどうか、とりわけポリネシアに焦点を当てて、お話しいただきたい。それでは、先にクックからお願いします。

(平田) はい。先ほどもお話しさせていただきましたが、クック諸島は15個の島からできている島国です。その全部を集めても2万人の人口しかいないのに毎年10万人の旅行者が訪れる観光地です。いつも私が使う表現として、日本人にとっての沖縄に行くような感覚でニュージーランド人はクック諸島に行きます。飛行機で4時間、そして同じ通貨、同じ言語でビザも要らないですし、全く違う文化なのに行きやすいということでニュージーランドからの旅行者が多いです。10万人の旅行者のうちの70%以上、75%ぐらいはニュージーランドから来ている人たちで、ニュージーランド航空が毎日2便、大きい飛行機を飛ばしてたくさんのお客を連れてきています。ですから、インフラはすごく整っていて、信号も一個もないような島ですが、立派なホテルがたくさんあり、レストランも本当に外れがなく全部おいしいです。それでいて、いい意味で手付かずの島といえますか、外国人が土地を所有してはいけないという法律もあるので、外資系のチェーンレストランやマクドナルドなどももちろんないですし、全てが島カラーでありながらインフラだけは世界基準で整っているところがクック諸島の一番いいところだと思います。360度どこでもラグーンで、どこでも泳げる。ここだけに行ってくださいというのではなく、島のどこを見てもらってもきれいというのが一番いい特徴だと思います。きょうはラグビーの話もできてよかったです。外国人選手をぜひ応援してください。

(小林) 私も初めてクックに行った時に、平田さんにご案内していただきました。素晴らしいリゾート地でした。それでは、先ほどの質問で、三村さん、お願いします。

(三村) はい。その前に私のクック話もさせていただきますと、もう随分前になりますが、私は2000年にサモアからクック諸島に出張で行きました。当時、保健関係のプロジェクトをやっていました。先生は平田さんが空港で迎えてくれて楽しく観光されたと思いますが、私はクック諸島に行きましたら空港で保健省の人が車の鍵を僕に渡してくれて「これ自由に使っていいから」と言われて、ピックアップトラックを1台借りました。どこへ行っていいか分かりませんので、取りあえず車でブーッと走って20分ぐらいいたら、また同じような風景になりまして、たぶん1周してしまったということが分かりました。それでもサモアから行くと、あるいはトンガなどほかのポリネシア地域から行くと、やはりクックの観光開発は非常に進んでいますし、観光客が楽しめる施設がたくさんあったのがすごく印象的でした。当時、病院の支援をしたのですが、クック諸島の人も典型的なポリネシア人ということで、体重計を差し上げる時に仕様として200キロまで測れること、分娩台は150キロの荷重に耐えることというので調達したのをよく覚えています。

私が JICA の大洋州事業の担当をしていた時に、対大洋州地域の協力の方針のようなものを作りました。もう 7~8 年前になりますが、その時にメラネシアについては資源もあって、人も多い。行政の部分では遅れていますが、可能性の非常に高い国ということで、経済的にも日本との経済交流のポテンシャルが高い国ということで位置付けていました。

一方でミクロネシアは、例えばパラオなどは典型的ですが、国の規模や成り立ち、経済状況を見ると、これはもう援助をすること、あるいは外からの支援を受けることを前提に国が成り立っていると考えたほうが良いという位置付けにしました。

そういう中でポリネシアは大きき的には両者の中間ぐらい、10 万人ぐらいの人口規模で、国土もメラネシアほどではないけれども、ミクロネシアよりは大きいということで、捉え方が非常に難しい。ただ、われわれ開発ワーカーにとっては、特に私は地球規模課題、環境問題や防災をやっていたので、そういう小さい島で持続可能に生きていくためにはどうすればいいのか、というテーマはとてもやりがいを感じます。その答えを求めするために沖縄の人々の力を借りて水の協力をしたり、環境分野、ごみの協力をしたり、気候変動対策ということを考えていきました。私にとって幸いだったのは、そういうポリネシアのような小さい国が、いってみれば地球規模課題、地球の縮図であるということで、私自身が開発ワーカーとしてどういう視点で開発に当たればいいのかという示唆を与えてもらったのはとてもいい経験だったと思います。

そういうことで、私自身はこれからも大洋州、特にポリネシアにはコミットしていこうと思いますし、またポリネシアにはそういう小さい島ながらも、その中で完結していけるような持続可能性を高めていけるポテンシャルがあると信じています。

(小林) 本日はポリネシアを切り口に話を進めました。お二人ともまだ話し足りないかもしれませんが、残念ながら時間が来てしまいました。続きは、懇親会の中で進めていただけたらと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

BMC インターナショナルによるフィジーでのプロジェクト採用とツバルの環境対策の絵本の日本語版完成

(司会) ありがとうございました。さて、懇談会に移る前に、PIC より幾つかご報告があります。まず 1 点目ですが、フィジーにおいてこのたび日本企業による徴税システムの導入が決定した件につきご報告をさせていただきたいと思います。先ほど私の報告の中で昨年 12 月にフィジーにビジネスミッションを派遣したお話をさせていただきました。そのミッションの成果として、ミッションにご参加いただいたビーエムシーインターナショナル社の徴税システムがフィジーで採用されることが決まりましたので、本日は同社の山田哲夫社長よりご報告させていただきたいと思います。お願いします。

山田哲夫 (BMC インターナショナル社長) :

こんばんは。紹介にあずかりましたビーエムシーインターナショナルの社長をしています山田と申します。

昨年、太平洋諸島センターさん主催のミッションで参加させていただきました、その機

会にフィジーの財務大臣ならびに国税長官とお会いさせていただきました。その時に向こうのほうからぜひ徴税システムをフィジーのほうへ持ってきてくれないかという強い要望がありまして、何回か訪問させていただいてシステムの説明やパイロット設置などをやった結果、非常に好感を持ちまして今回の成約に至りました。向こうは現地でかなりのインドの方が商売をしておられ、徴税が非常に難しいと。

ところが、非常に感心したのは、財務大臣の方が 15%の VAT を課していたのですが、昨年 12 月に 9%に下げられたと。その代わり、より徴税をしっかりしていくということをやったわけまして今回の成約に至ったわけです。このようにして、われわれ一人の力でやっているのではなく、太平洋諸島センターさん、ならびに現地の日本大使館、ならびにフィジーの日本大使はじめ皆さんの力を借りまして今回の成約に至ったわけです。

私もアフリカなど海外のいろいろな所へ行っていますが、今後の、特に太平洋諸島を見ますと、大手さんがなかなか行かれない。逆に中小企業の技術を現地の企業さんは欲しがっているというところで、やはりこれからはオールジャパンで事業を勝ち取っていかねばいけないのではないかと。中小企業一つが、なかなか太平洋諸島を一社で単独で出掛けて何回も行くというのは非常に難しい。そこにおられる JICA さま、それから日本大使館の皆さん、それから太平洋諸島センターの方々のご協力を得て成約にこぎ着けると。向こうの企業さん、ならびに皆さんもやはり日本の技術を待ち望んでおられますし、先ほども言われたように教育にもっと力を入れていかねばいけないと感じておられますので、今回サモアにも行かれますけれども、こういう機会を利用して、ぜひ皆さん参加して、うまくいけばありがたいと思います。簡単ですが、説明を終わりにします。(拍手)

(司会) ありがとうございます。2 点目ですが、本日は皆さまのお手元にこのような『笑顔の島の作り方』という絵本をお配りしています。この絵本は JICA の海岸保全のプロジェクトに関わった専門家の有志の方々によってツバルの土地の成り立ちなどを伝えるために作られました。本日は制作に当たられた JICA の松館文子さんにおいていただいていますので、松館さんより絵本のご紹介をいただきたいと思います。

松館文子 (JICA)

皆さん、こんばんは。松館と申します。皆さん、こちらにいらっしゃって封筒をご覧になった時にどのようなビジネスの書類が入っているかと思ったら絵本だったので、びっくりされたのではないかと思います。今回 PIC のご厚意で封筒の中にそれを入れさせていただきました。2009 年からツバルのほうで海岸をどうやったら持続可能な方法で保全できるかという調査のプロジェクトがありまして、私は 2 年半ツバルに住まわせていただいていましたが、最初に行った時は「5 メートルの壁を造ってくれ」などというお話をすごくされて、すごく苦労していました。ワークショップを何回か開いてツバルの成り立ち、どうやったら持続可能な管理ができるかというお話をさせていただいていたのですが、なかなか通じなくて、何とかハートに伝わることができなかつたかと思ひまして絵本や歌を思い付いたわけです。私が 2 年半の任期の中で絵本を作ることはできたのですが、それを皆さんに配布することができずに帰ってきました。帰ってきたのですが、その思いがずっとありました。ツバルのフナフチという首都には大体 1,000 世帯ぐらいが住んでいるのですが、

何とか 1,000 冊作りたいということでいろいろ働き掛けをさせていただいて、たくさんの方のご厚意がありまして、ツバル語で 1,000 冊刷りまして、ツバルに届けることができました。その時は高田さんにも一緒に行っていただきました。

そのご厚意で頂いたお金がまだ余っていたので、調子に乗って日本語も作ってしまいました。それをたくさんの方のお手元に届けられると嬉しいと思っていたのですが、きょうこのような機会を頂きまして皆さんに届けることができました。どうもありがとうございました。（拍手）

（高田） どうもありがとうございました。